

## 身体の受動様態と能動様態の問題について

— 西田幾多郎の「純粹経験」の立場を出発点として —

○ 伴 義孝 (関西大学 文学部 身体運動文化専修)

キーワード：川中論理と川岸論理・日常性と非日常性・重力の問題

### はじめに

本研究では、次の課題を出発点にして、標題の問題を考えてみる。

**課題** = 人間は、なぜ、自ら積極的に「動く」能動様態の身体と、自ら積極的に「動かない」受動様態の身体とにかかわる二様態の文化を作り上げたのだろうか？

この課題にいう積極的に「動く身体」の文化とは「近代スポーツ＝競技スポーツ」に代表される西洋原産の文化を言い表し、積極的に「動かない身体」の文化とは「能・茶道・坐禅・太極拳・ヨガ・からだ気づき」などに代表される東洋原産の文化を言い表している。こうして身体にかかわる2様態の対照的な文化が存在しているという事実は、それぞれの文化の生成過程において、その源泉となる「身体」の属性(受動様態)と機能(能動様態)との問題がいずれか一方に偏在して関与していることを証明しているのではないか。本研究ではこの問題を考えてみる。

### デカルトの捉える身体

デカルトは「cogito ergo sum＝我思う、故に我あり」(1637)の命題のもとに「哲学の第一原理」としての「二元論」(精神と身体・主観と客観・意識と物質などの2項対立発想)を唱えた。デカルトは、ある「実体」が存在するという「真理」を探求するために、例えば「身体をも私が持たぬと仮想することはでき」としても『私』が「全く存在せぬと仮想することはできない」という推量のもとに、「もしも私が考えること」を「ただそれだけをやめていたとしたら」、「私自身が存在していたと信じるために何らの理由をも」その『私』は「持たないことになる」という結論に至った。そして、『私』(主体)は「一つの実体」であって、その実体の本質は「考えるということだけ」であるから、『私』を『私』であらしめる『精神』は「身体と全く別箇のもの」であると考えたのである。デカルトは、この『私＝実体』を探求するために、「いささかでも疑わしいところがある」ことをすべて斥けていき、「感覚はややもすれば私どもを欺くものである」から、その『感覚』(身体の受動様態性)をも実体ではないと考える。かくして、デカルトを合理的発想転換の

「父」とする以降の近代哲学は、受動様態の「身体」を、能動様態である主体としての「精神」(知性)から切り離してしまい、その「考える私」をすべての外側におく二項対立文化(川岸論理＝伴の造語・非日常性)を拵える合理主義の驀進を誘導させしめたのである。

### 西田幾多郎の純粹経験

そこで、近代哲学は、身体の内在する「経験」を受動様態であると定立して、能動様態の「知性」の働きをすべてに優先させることになる。知識の起源を感覚的経験に求めたロック(1690)でさえ「対象が感官に与える刺激や印象を受け取る能力」として経験を捉えている。これに対して西田幾多郎は「経験を能動様態であると考えた(注：発表時に伴の見解を展開)。初期の西田が説く「純粹経験」(1911)とは、主観と客観との、または意識とその対象との未だ分離していない「没我の経験」としての意識と行為の統一的状态をいう。もちろん西田も精神と物体とが分立していることを認める。しかし、精神と物体は、それぞれ独立したものであると見做さない(梵我一如・身心一如)。この「見做さない」は西田のパラダイム「われわれは世界の中で生まれ、世界の中で働き、世界の中で死んでいく」(川中論理＝伴の造語・日常性)に根ざしている。こうして後期の西田は、純粹経験の思想を発展させた「行為的直観」の思想(1933)において、受動様態と能動様態との「生の循環」の問題を説くことになる(注：発表時に伴の見解を展開)。

### 発表時の展開

身体は絶対受動様態で重力に拘束されている。スポーツの語源は中世ラテン語「deportare」に由来するのだが、そのデポルターレ文化は、本質的に受動様態の「portare」(重力と闘う肉体労働)からの解放「de」願望を動因として発展してきた。発表時には、この「重力」の問題と「受動様態」及び「能動様態」との問題との関係について、「純粹経験」における「身体」の立場から、また「川中論理」の観点から、今日的な生活問題に視点をおいて、議論を試みたい。